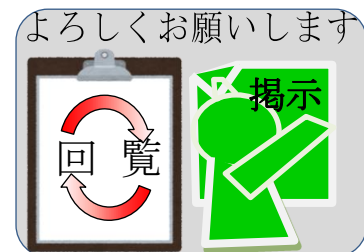


今年度、最終号となりました。1年間本当にありがとうございました。  
今後も研究内容を中心に、様々なことを発信していきたいと思いを。  
また、来年度のNEWSLETTERも、ぜひご覧ください



## 第22回 教育研究発表会

令和3年2月19日(金)第22回教育研究発表会を開催しました。初めてのオンラインでの開催となりましたが、京都市立学校・園をはじめ、全国からも多くの方にご参加いただきました。これまで研究にご協力いただいた研究協力校の校長先生をはじめ、教職員の皆様にはこの場を借りて心より感謝申し上げます。



研究発表動画・研究論文・成果物・京都発については、3月下旬に研究課 Web サイトに掲載します。  
ぜひご覧いただき、各校での実践にご活用ください。

京都市総合教育センター研究課



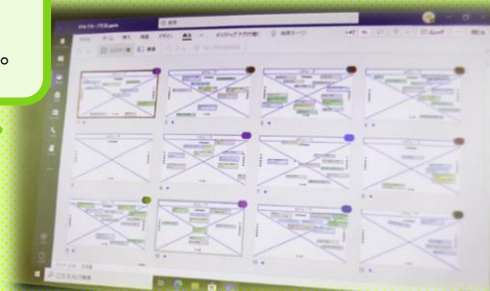
こちらからも  
アクセスできます。

ご参加いただいた皆様から、チャットを通して研究報告に関する質問・意見をいただき、今後の教育活動につながる有意義な発表会となりました。

## 第4回 フレッシュせんせい教師力アップ教室

今回は、先生方に一人1台 GIGA 端末をご持参いただき、Teams を使ったグループ交流を実施しました。学級経営や学習指導、生徒指導などの側面からお互いの悩みや困り話を話したり聞いたりすることで、その解決方法について考えることができました。また、GIGA スクール構想に向けて、先生方が実際に端末に触れながらその可能性について感じていただくことができました。

すべてのグループの交流の様子を  
全体で共有することができました。



アイスブレイク



一人学び



グループ学び



### 参加者の振り返りから

- ・たくさんの先生が、子どものことを一番に考えて真剣に悩み、行動されていることがわかりました。
- ・「悩みは成長への足掛かりなんだ！」と感ずることができました。
- ・同じ悩みをもつ先生方と話して、「やってみよう！」と実践できそうなことが学べました。
- ・一目でグループの人たちの考えを見ることができたのが良かったです。
- ・例えば、生徒が入力した文章に対して、即時にコメントできると感じました。

令和3年度  
第1回 5月7日(金) 18:30~20:00  
総合教育センターにて

〈小学校 プログラミング教育〉  
 問題解決能力を育むプログラミング教育の在り方  
 —教科横断的な活用と思考の振り返りを通して—  
 研究員:木村 祐太

## 選択を委ねると児童は育つ

学んだことを使えるようになること、これこそが学習の目的です。プログラミング的思考は、問題解決能力として生かされてこそその思考と言えます。

プログラミング体験や思考を可視化し促す思考ツールを使った実践は既に各学級で取り組まれていることと思います。「児童がプログラミング的思考により習熟し、自在に使うことができるようにする」ためには、教科横断的に取り組み汎用性を実感できるようにすることや、振り返りを行い、その思考の有効性を実感できるようにすることが大切です。

さらに、指導者が「～のように考えて」「〇〇の思考ツールを使って」のように指示するのではなく、「どのような考え方ができるかな」「めあての達成のために、考えやすい思考ツールを選ぼう」のように、選択を委ねることも大切です。それにより児童は、「〇〇したいから、この思考ツールを使おう」「この思考ツールは、このような時には向かない」など、どのような時にどのような考え方が良いのか判断しながら活動するということがわかりました。こうした体験を通して、児童は必要に応じて適切な思考を選択する力を身に付けていきました。



〈中学校 キャリア教育〉  
 活動のプロセスに注目し、成長を実感する生徒の育成を目指すキャリア教育  
 —「基礎的・汎用的能力」を指標として—  
 研究員:田中 淳一

## 共有の輪を広げたい

これは、まず思い浮かんだ言葉であり、研究を通して強くなった思いです。活動の成果（結果）だけでなく、プロセスにも注目することで、より多面的に成長を実感することにつながります。本研究では、活動のプロセスにおいて発揮される「基礎的・汎用的能力」を、生徒が成長を実感する視点として重点化しました。具体的には、「基礎的・汎用的能力」について整理した指標を作成し、各教科の授業において、活動・振り返りの場面で活用しました。

初めから上手くいったわけではありません。しかし、生徒・指導者双方に教科目標が第一であるという認識、そして教科目標を達成するために発揮された「基礎的・汎用的能力」に注目するという位置付けが共有されたことで、少しずつ生徒の振り返りが充実したものとなってきたように感じています。

勉強の面でも、もちろん成長できたと思うし、自分の考えを相手に分かりやすく伝えることが成長できたと思う。

ある生徒の振り返りです。生徒・指導者が共に成長を実感する視点として、「基礎的・汎用的能力」の指標をご活用ください。



〈小学校 外国語教育〉  
 主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を目指して  
 —児童の気付きを大切にしたい取組を通して—  
 研究員:丹後 由香

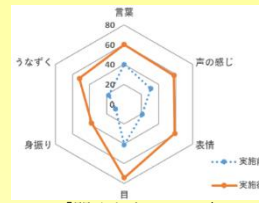
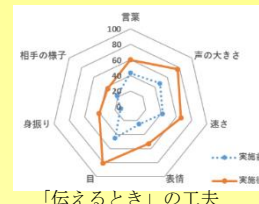
## 「思い」をもったやり取りを

本研究では、今年度より京都市で導入された低学年「英語活動」に着目して研究を進めてきました。

実践を通して、児童自身が非言語的要素の有用性に気づき、コミュニケーションに生かそうする姿も見られました。言語の習得が未熟な段階での外国語によるコミュニケーションは、身振りや表情、声の調子などあらゆる手段を活用してわかりやすく伝え合おうとする態度を育む良い学習機会であると考えられます。

また、児童の主体的な姿を育むために活動の目的設定や場面設定を工夫することで、児童が「誰かのために」「何のために」といった「思い」をもって活動に取り組み、学びに向かう姿勢が大きく変化することもわかりました。

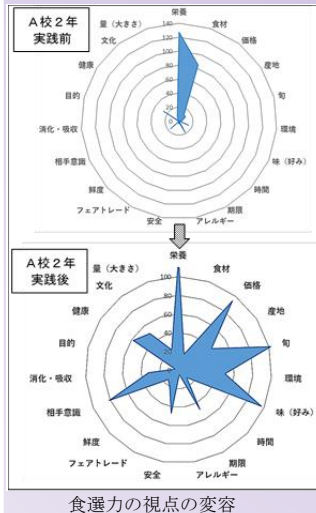
さらに、児童がコミュニケーションを図りながら活動に取り組む自身の姿を振り返り、その姿を指導者や児童の言葉によって価値付けることでよりよいコミュニケーションを図ろうとする姿勢を高めていきました。



〈中学校 食育〉  
 視野の広い食選力を育む食育の在り方  
 —多面的・多角的に考える取組を通して—  
 研究員:今川 早紀

## 何を大切に選ぶのかを考える

中学生の食生活は、保護者が管理している場合が多く、「与えられる立場」にある生徒が多いと考えられます。しかし、いずれは自分の食生活を自分で管理する日が来ます。その際に、より多くの視点から食について考え、状況に応じた適切な選択をすることができれば、より豊かな生活につながるのではないのでしょうか。生徒がより多くの視点から食について考えるために、教科横断的な取組を行いました。各教科等の目標を達成する過程に、食育の視点を取り入れることで、食に対する生徒の関心が高まり、自分事として学習に取り組む姿が見られました。また、各教科等において、教科特性に合わせた食選力を働かせたことにより、食選力の視点が広がりました。見方を変えると選ぶものが異なることや、状況に応じて選び方が変わることが分かり、何を大切に選ぶのかを考えることの必要性に気付いている生徒が多く見られました。



横断的な取組を行いました。各教科等の目標を達成する過程に、食育の視点を取り入れることで、食に対する生徒の関心が高まり、自分事として学習に取り組む姿が見られました。また、各教科等において、教科特性に合わせた食選力を働かせたことにより、食選力の視点が広がりました。見方を変えると選ぶものが異なることや、状況に応じて選び方が変わることが分かり、何を大切に選ぶのかを考えることの必要性に気付いている生徒が多く見られました。



〈小学校 キャリア教育〉  
 自己肯定感を高めるキャリア教育  
 —PDCA サイクルを意識した各教科等における活動を通して—  
 研究員:大嶋 慧

## 自分のよさに気付く

研究実践にご協力いただいた学級の児童へのアンケート調査「自分にはよいところがある」の項目で、実践後、肯定的な回答をする児童が増えました。

この要因として、キャリア・パスポートの取組を生かし、①PDCA サイクルを意識した授業実践を積み重ねたこと②スモール・ステップの目標を設定させたこと③教科のねらいとキャリア教育の視点から学びを振り返らせたこと④肯定的な言葉がけを行ったことが考えられます。

自分にはよいところがあると思いますか。	肯定的な回答		否定的な回答	
	あてはまる	少しあてはまる	少しあてはまらない	あてはまらない
実践前	29人	33人	27人	6人
実践後	34人	40人	18人	3人

これらの取組を通して、児童に小さな成功体験を積み重ねさせ、「やればできる」という気持ちをもたせること、「自分にはよいところがある」と気付かせることができました。

本研究の取組を参考にさせていただき、各校でのキャリア教育の実践が更に充実していくことを願っています。



〈中学校 教科指導〉  
 学ぶ意味の自覚に働きかける授業改善に向けた一方策  
 —授業の在り方とテストの在り方を通して—  
 研究員:藤本 裕之

## 「社会科は、生活の中で役立ちそうですか？」



虫眼鏡を使うことで、色々な視点や考え方ができるようになって、何度もやっていくうちに虫眼鏡を見なくても自分で視点を考えてつなげていけるようになったので、そういうことが使えそう。 12月生徒アンケート 生徒の回答

“覚える”から“使える”社会科を目指した実践の成果です。授業で飛び交う生徒の多様な予想には、実は色々な場面で使える方法的な知識（見方・考え方/生きて働く知識）が隠れています。予想の正解・不正解ばかりに着目せず、予想の形成過程に着目すると、それはぼんやり見えてきます。でもやっぱり見えにくい。そこで指導者にも生徒にも、この方法的な知識をはっきり見えるようにと作成したアイテムが、虫眼鏡こと“見える一ペ”です。

生徒が予想する際、どんな視点に着目し、どんな既習内容や生活経験と結び付けて考えようとしているのかを可視化し価値付けます。そうした実践を繰り返し、更なる問題を予想する場面で方法戦略として意識的に方法的な知識の発揮を促した結果が、冒頭の生徒の回答です。

テストでは、「あの範囲で学習したことって、つまりこういうことだったのか。他にも使えそう！」という意識を高める問題も作成しました。研究課 HP をぜひご覧ください！

